

経営と健康

第2回

栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講談師 一龍斎貞花

西郷隆盛は、靖国神社に祀られているか。残念ながら祀られていません。

明治二十二年、大赦によって逆賊の汚名は外されましたが、西南戦争に朝廷を頂く官軍と戦ったことは、反乱軍の逆賊であるとして祀られていません。十五代将軍徳川慶喜の曾孫で、靖国神社十一代宮司を務めた徳川氏は、定年を前に辞任、これは珍しいことだが、西軍はクーデター、西郷を祀ろうという発言があったとか。旧幕府が勝つていれば西軍はクーデターとなろうが負けてしまった。こうした発言が一部批判を呼び辞任となってしまうた。

維新第一の功労者といえど最後が肝心。どんな素晴らしい経営をしていても最後に誤るとアウトになってしまいます。靖国神社は桜の名所でもあります。境内二本の桜が東京の開花宣言のもとになっているが、桜を植えたのは木戸孝允。来年が創立一五〇年です。

名君と言われる薩摩藩島津斉彬四十九歳で死去。一説によると新技術に巨額を投資する斉彬に反発した勢力によって毒殺されたとも言われている。

後継藩主となった忠義が若年のため、忠義の父で斉彬とは、腹違いお由羅の産んだ久光が、国父となって政を行い、久光を支えていくのが、影の宰相と言われる家老小松帯刀。西郷・大久保一蔵（利通）を登用していきます。勤王の志士たちは、安政の大獄など強引なやり方に反発し、どんどんエスカレートして討幕へと向かい、薩摩藩の中にも血気にはやる誠忠組の面々は「朝廷が中心になって幕府を改革しなければいけない。もし朝廷の命を聞かぬ場合は、討幕も辞さない」兄斉彬の志を継ぐ久光も同様の考えではあるが、機は熟していないと、小松や大久保が思い止まるように説いても、脱藩して京・大坂へと向かいます。京都所司代を倒し、勤王の先駆けを

しようと天下の浪士が、京・大坂へ続々と集まって参ります。こうした情勢に、朝廷は久光に対し

「兵を率いて上洛し、浪士たちを鎮圧するよう」

この仰せに約一千の兵を率いて上洛を決意。

「誠忠組の者は、西郷を尊敬しておられますから、西郷でなければ、誠忠組や天下の志士を抑えることは出来ません。何卒西郷のご活用をお願い申し上げます。」

「兄斉彬を尊敬し、久光嫌いの隆盛とあって、余り重要視していない久光も、小松や小納戸役大久保の言葉に洪々承諾し、

「されば上洛に先立ち、西郷に九州各藩の情勢視察を申しつける。下関で待つて報告するように」

流罪を許された西郷は、

「尊王攘夷を唱え、不穏な企てをする者がある。我が藩中にもこれらと交

際している者がいる由である。このような軽率な振る舞いは断じて許さない。違反した者は断固たる処置をする」

過激な藩士の暴発に釘を刺し、村田新八を伴い下関へ。ここで平野国臣に会い、京都が一触即発の状態と聞き、志士たちが一気に暴発する恐れあり、なんとしても志士たちを抑えなければいけない。斉彬公なら緊急の対応とお許し下さる。久光公も大丈夫だろうと村田新八と共に京都へ。下関へ着いた久光は命令を守らず京都へ立ったと聞き、

「斉彬公の足元にも及ばん」と自分を馬鹿にしたという噂もあり、

「おのれ、我が命令に背く奴」カンカンに怒り、西郷を捕らえ徳之島へ。さらに遠い沖永良部島へ、村田新八は喜界島へ流罪。

沖永良部島へ流罪、体重激減

奄美大島流罪と違って罪人としての

流罪とあつて吹きさらしの牢へ。雨・風は容赦なく、食事もわずかな麦飯に塩がおかず。おまけにフィリリア病（糸状虫）にかかり、鞆丸が子供の頭ぐらいいはれ、体重も一〇八キロから七〇キロとやせ衰え。見かねた島の役人、土持政照が、自分の屋敷内に座敷牢を作り、食事を与えたので元気を取り戻し、お札に島の子供たちに読み書きを教え、この時に読んだのが佐藤一斎の「言志四録」。この中の「敬天愛人」の言葉を知り、この言葉を有名にし、上野の銅像に「敬天愛人 西郷隆盛」と記され西郷の言葉のように言われているが元は佐藤一斎の書から。「西郷南洲手抄言志録」は、生涯愛読し続けた「言志四録」から西郷が特に心に響く言葉を選び出したもの。一斎は美濃岩村藩藩主の近侍から、のち幕府の学者第一人者となり三千人の弟子を教え、多くの有名な学者を育てた人。

罪人として流罪されながら、西郷の原点ともいうべきものを会得したんです。マイナスをプラスに。左遷された時そのまま落ち込むか、逆にバネにして再起するか、成功・不成功はその人にありますね。

久光の上洛は、「尊王攘夷に向かつてくれるに違いない」と志士たち。久光は「西郷が扇動したに違いない」と、お互い勘違い。誠忠組の一部が決起しようと寺田屋へ集まるや、久光の命令で薩摩藩士が、薩摩過激派を斬るといふ凄惨な同士討ち。久光はこの寺田屋事件で浪士の暴挙を未然に防いだとして、朝廷から信頼を得るばかりでなく、討幕を企て京都所司代を討とうと集まった浪士を抑えたことで幕府からも好感を抱かれ、幕府に対して大きな発言力を持つようになり、ここに朝廷と幕府の融和政策、公武合体に乗り出します。帯刀は京都へ出張し朝廷と交渉を重ね、故斉彬公に照国公の称号を賜うなどの功績により、二十八歳の若さで家老に昇進。人吉藩の家老から大火の復旧資金借用を依頼されるや快く承諾。これがのち薩英戦争で米を焼かれてしまった時、人吉藩が借入金返済として米を贈ってくれたので食糧難を切り抜けることが出来、矢張り情けは

人の為ならずです。

「小松、そちは我が藩の政治の重点をどこに置いたら良いと思うか」

「ハイ、文明の進んだ外国が押しかけて来ているのに鎖国を続け、軍備が遅れています。もし戦いになればたちまち敗北、日本を乗っ取られる恐れがあり、まずイギリス、オランダの文明を取り入れ、人材育成が必要と存じます」

「わしもそう思う。外国の学問を学ばせ、いつまでも外国から武器を買うばかりでなく、我が藩でも造るようにならねばいかん」

「それには大きな金がかかります。御用商人に藩の金を貸し与え、琉球の砂糖や唐物を買えば大坂で売れば、その利益で汽船を買ひ、他藩と交易をします。儲けが出て藩を富ませることが出来ます」

小松の働きで藩財政を豊にし、磯の集成館を充実させ、次々と新しい事業に取り組み人材を登用。

西郷はまだ許されません。この間に大久保は、久光、帯刀に重用され、久光の側近に。かくして小松、大久保は公卿岩倉具視と会談。

公武合体を建前に、「幕府に改革を促すため、大原重徳を勅使として江戸へ派遣」が決定。久光は警護役として随行。大久保も側近第一人者として江戸へ。西郷がいない間に大出世。

一、將軍は諸大名を率いて上洛し、朝廷と会談すること。

一、沿海の五大藩を老中に任命すること。

一、一橋慶喜を將軍後見職に、松平春嶽を政治総裁に任命すること。

この申入れを認めさせ、意気揚々江戸を立ち、鶴見の生麦村に来た時、行列を横切ったイギリス人を殺傷。生麦事件から薩英戦争に発展するという。この続き次号のお楽しみに。ポポン。

